

青木淳君との思い出

2025 年 5 月 7 日 中越慎介

あきつ会ホームページで小松泰彦の“故青木淳に寄せる追悼”を読みました。青木淳の誕生から幼少期に至る危うくも命を繋いだ成長逸話などが綴られ興味深くもあり人間青木淳の原点を知る上で貴重な追悼文となっていた。愛妻松子さんとの結婚に至るまでの彼の必死で直向きな姿がユーモラスに描かれており 59 連発銃の秘話を遠慮がちに書かれているものの追悼文に載せた小松泰の感性和ウィットと包容力に脱帽というところ。

青木淳とは私が（株）アイネットの長野支社時代（昭和 50 年～平成 8 年）に現在活動は無くなってるが深志高校同窓会長野支部で卒業以来の出会いであった。金井から青木になった事もこの時知った次第。この再会以来青ちゃんとの濃密なる付き合いが始まった。ほぼ毎週のように私の行きつけの駅前のスナックで若くて綺麗なママ相手に楽しく話し、飲み、カラオケで歌い小松が褒めてくれた“あずさ 2 号”もこの頃繰り返し歌ったものだ。

こんな月日が何年か続いた。ママが青木のことを凄く気に入ってたので青木が来ると嬉しそうに“青ちゃん、青ちゃん”で盛り上がったものだ。時代はバブル真っ只中、今ではなかなか手が届かないサントリー“響”を飲み続けた良き時代であった。支払いはほとんどというか全部が私の支払い、私というか会社の（打ち合わせ食事代）とか（富士通営業の接待）とかの経費で落ちていたわけだ。青ちゃんが“なっこし、わりいわりい”と“気にしない、俺じゃない会社が払うだけ”でいつも終わり。青ちゃんは結構強くて“響”を旨そうにオンザロックで飲んでたな。お帰りの時間になるとママが他の客がまだいるのもかまわず青木が乗って通っている自転車置き場まで見送ってくれた。ママが“青ちゃん随分飲んでるから気を付けてよ！”と言うと“だいじょう、だいじょうおらは蹴ったくりベントで”などと最後まで笑わせて帰って行ったものだ。青木は飲み代のお返しかしらないが何回か自作の燻製物を持って来てくれた。ソーセージ類がビックリするほどの旨さ、家内も絶賛する出来！青木の一つのことに拘る研究熱心さには感心したものだ。青木が我が家へ燻製物を届けに来ると家内が喜んでどちらかかと言うと明るく話し好きな家内と玄関先で長いことペチャクチャで家内がキャーキャーと喜んでるのがいつものパターンだった。

そんな青ちゃんが交通事故に遭った時家内から電話で知らされ急遽長野日赤へ行った。奥さんは自宅へ何か 着替え物を取りに帰っていて看護婦から集中治療室に入っているのもので明日朝まで会うことは出来ないと聞かされその夜は帰宅した。

後日青ちゃんから事故の状況を聞かされビックリ。自転車で横断歩道で待っていた時クルマに跳ねられ現場検証では10メートル吹っ飛ばされ頭をコンクリート道路に打ちつけられたとの事。頭蓋骨一部骨折で済んだものの危ないところだった。事故を起こした40代の男性は飲酒運転だったようでありながら直ぐ救急車の手配をしてくれたとの事。飲酒での過失事故だからかなりおもしろい刑事罰になったとのこと。青ちゃんは加害者が飲酒運転でありながら直ぐに救命の手配をしてくれたことに深く感謝をしており決して悪い事、恨み事は一切口にしていなかった。青ちゃんらしい一面を見た事柄だった。

時は移り過ぎ私は平成8年頃松本本社へ戻り数年が経過した頃青ちゃんから電話があり“松本へ行くから飲まねえ”とのことで三溝牧夫と3人で松本駅前の行きつけの小料理屋とスナックでこれ又（打ち合わせ食事代）で遊んだ。その後小松泰も加わるなどして楽しい一時をすごした。いつの飲み会が最後になったのか正直思いだせないが青ちゃんの不慮の事故死を聞いた時は“なんでー！ 漸く体調が戻ってきたというのに”。絶句である。あの人懐っこい笑顔と楽しげなお喋りをしている姿が今でも目に浮かぶ。

合掌